

# 動物園暮らし 48年

小 松 守

(秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長)



動物園に身を置き48年になった。いろいろな動物と向き合い、独特な姿形や営みを見ながらその尊さを思い、またイノチの不思議さ神秘さを感じ、様々なことを考えてもきた。

動物を間近にして息づかいを感じれば、動物のダイナミズム、生きる力に圧倒され、あるいは何気ない仕草に可憐さや人間っぽいユーモアも見出し魅了されてもきた。獣医師として飼育現場にいた若い頃は動物と格闘して診療もし、多くの死に向き合い、自身の非力さ無力さを痛感し、隠れて涙したこともあった。

動物の子育てを見ると自身の子育て体験を思い出す。親子の関わり合いは微笑ましく、そこに愛の原点も感じた。それとは別に子を残そうとする必死さを感じる。命をつなぐ営みは動物の生きる意味のようなもの、動物の種を超え通じる大事なものがあることを学んだ。

誕生と反対側にあるのが死だ。動物園では避けて通れない。そこに儚さを感じるし、動物たちの死と向き合う度に、彼らが動物園でどんな存在であったのか、私に問いかけてきたようでもあった。死の結果は同じだが、そこに至る過程は様々だ。病気や寿命などは納得し諦めもできたが、鳥インフルエンザの発生時には動物に理不尽な死を宣告したこともあった。

死は個の消滅だが、特別な思い出を残したこともあった。大けがに耐え懸命に生きた「義足のキリン、たいよう」はイノチの尊さを考えるよい機会にもなり、また動物園のあり様を変える力にもなった。

長い動物園経験や動物体験は私を刺激し、動

物を通し人や自然に思いを巡らす機会にもなっていた。折に触れ、思ったことをメモしたノートが本棚に何冊か埋もれている。中身の取るに足らなさに呆れながらも読み返してみると、「生きること」とか、「子を育てること」などをテーマにしていたようだ。稚拙な思いを少し書き記してみる。

一つは「生きること」についてだ。動物は変化し続ける自然環境に影響され生きてきたし、今も生きている。環境変化は往々にして動物たちに厳しい試練を与えてきた。動物の生存要件である「食物」、「水」、「休む場」、「子育ての巣」、これら四つは自然環境そのものだから、動物は否応なしに環境変化に合せ生きねばならないのだ。動物の姿形、生き方を見ると苦難を乗り越え生きてきた懸命さを感じるし、「生きること」の尊さがわかる。

キリンの長い首は、昔森から出されたキリンが草原に残る高木の枝葉を食べざるを得なくなったからだし、森から草原に出て生きる道を選んだライオンは、森で暮らした時のヒョウ柄を消し草原で目立たない今のライオン色になった。同じように森から出された人も、森の外で食物を得るため、直立二足歩行で解放された手を使う特異な姿になったのだ。皆、自然が与えた姿形だが、そこには生き抜くための行動、挑戦するココロがあったから今生きているのだ。

進化論争はさて置き、変化に適応し生きるためには、姿形の変容だけでなく、生き抜こうと挑戦するココロも不可欠である。自然史レベルの形態変化と、懸命に生きようとする挑戦のコ

ココロは別次元であるが、両者は生きるための本質であることには違いがない。

サル類は熱帯系の動物だが、雪の中で生きるニホンザルは極めて異例な種だ。生きる力の強さにはいつも驚かされる。彼らは地理的隔離と大きな気候変動の中、防寒具の厚毛を獲得した。同時に、より暖かく安心して生きるため、互いに力を合わせ、サル団子をつくる行動を取っている。それは皆で生きようとするココロの表れだ。

生き抜く力の源は何なのか。生き物全てに備わった不思議なもので、挑戦のDNAとでも表現したくなる。それが環境変化、逆境を乗り越える時に生きる力を与えてくれているのだろう。環境変化のレベルは様々で、身の回りの小さな変化でもそれは当てはまるように思う。私たちはいつも何かに挑戦して生きている。「生きること」は変化への挑戦とも言える。

もう一つの関心事は「子育て」だ。日本の少子化や子育て問題は、社会、経済、政治の大きな課題で、多様な論点が構造的に絡まり、根が深い。動物の子育てを生物学的な切り口で捉えながら、それを通し人の子育てやその延長にある大事なものを考えてみた。

動物の子育ては、動物が子孫を残す一つの方法だ。動物の進化の流れで生じた生物学的な少子化と哺乳動物の進化が重なり登場したものだ。偶然と必然が動物母子の関係性を生んだのだ。母は子に乳を与え、子はそれを求め、互いが触れあう。こうした養育は他の動物にはない特異的で絶妙な仕掛けである。哺乳動物の子は母から沁み出る乳が生きる条件だから、育てられなければならない存在として生まれてくる。

「子育て」とは何か。動物は生きようとするが永遠のイノチはない。だから子を残す。残すとは、生き残れるようにすることだ。それがうまく行かない動物種は滅びるのだ。子育ては動物の種持続の営みであるが、人間で言うなら社会（地方や国）の維持であり、社会づくりの基

礎でもある。

「子育て」という言葉には「育む」という意味が込められている。ただ子を産めばいいのではない。厳しい環境、世界で子が生き残れるように「生きる術」を授けなければならない。動物にはそれを教える学校は無論ない。動物の場合、教えるのは母が中心であり、母が学校だ。

「生きる術」とは何か。食を得て、敵などから自分を守り、子をなし育てるなどだが、動物が高等化し、難しい社会で生きようになると、子の生きる環境も難しくなるから教えることも多くなる。子育てにかかる時間もそれに比例して長くなってゆく。動物が高等化すると乳濃度が低くなるのは、子を早く成長させないで母といる時間を長くするためだ。多くを教えようとする自然の絶妙な仕掛けである。

何を教えるのか。子を守る母と母を求める子の自然なふれあい、ココロの交信で結ばれる絆は子に愛を教える。子は母の乳首を嘔むと母に叱られるから相手の痛みを知る。懸命に生きる母の姿を見続け生き方を学ぶ。単純だが生きる上での大事な教育だ。愛情深い母に育てられた体験は子の体に染み入り、成長しやがて母になればそれを子に伝える。単純に見える母子のふれあいには、いのちをつなぐ基礎となる大事な要素が仕込まれているのだ。

人も哺乳動物、子育ての根っ子、大事な部分では差はない。これらは人が大事にすべき道徳にも重なる。Education（教育）の語源を辿ると「お乳を飲ませ養う」を意味するラテン語に行き着く。母子関係、親子関係は少子化問題の大事な項目でもあろうから、併せて考えて欲しいものである。

動物園人のこのコラムが、今回で60回目の大きな節目を迎えられたことに感謝したい。自身も古希を過ぎ、生きる環境が変わりつつある。新しいステージを生きるため何かに挑戦してみたいものだ。挑戦は生きることでもある。